

学習評価相談室

先生方から寄せられる疑問や悩みについて、高木まさき先生と大村幸子先生にうかがいました。

お答えします！



高木まさき先生

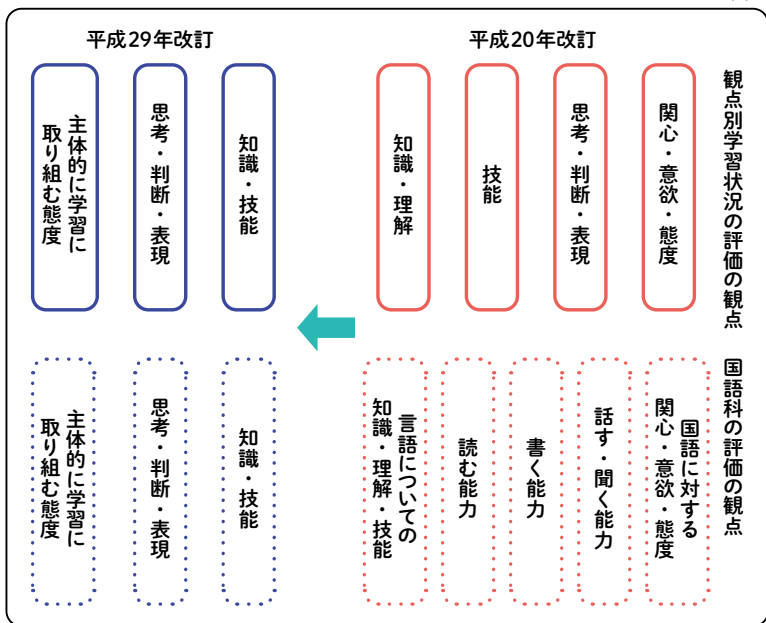
評価の何が変わり、それに応じて、指導はどうあるとよいのでしょうか？



今回の改訂で、全教科の評価が三観点になりました。国語では、これまで領域ごとに「思考・判断・表現」を評価していたわけですが、それぞれの領域の学習状況を総合して「思考・判断・表現」を評価するということになります（図1）。このことは、今まで以上に、「どんな思考力、判断力、表現力を育てたいのか」という意識をもって指導することを重視しているといえます。例えば、「筋道立てて考える力」を育てようとするとき、「書くこと」の学習で「初め・中・終わり」の構成で文章が書けるかどうかで評価

するのではなく、「初め・中・終わり」の構成とは何かを考え、「中」の具体例に整合性をもたせているといった、考える力が育っているかどうかを見取ることが大切になります。もし、ある子どもの「筋道立てて考える力」が十分育っていないと思えば、それは「書くこと」の中だけで支援を考えるのではなく、「読むこと」や「話すこと・聞くこと」をとおしても指導し、育てていくようにしましょう。活動をとおして、背景にある思考力、判断力、表現力が育っているかどうかを評価し、足りないと思ったらまた指導していくということになります。

図1



〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕を効果的に組み合わせて、単元の目標・評価規準を作成するにはどうしたらいいですか？



理想は、学級の実態や学校行事なども踏まえながら、どんな力をつけたいのか、それにはどの指導事項を組み合わせるとよいのかを、学校・

学年で考えていくことでしょう。とはいえ、先生がこれから全部組み立てるのは大変だと思えます。国語の場合、学習の内容のまとまりごとに、学習指導要領に示されている〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕を組み合わせるわけですが、どの指導事項どうしも、だいたい関連が図れるため、組み合わせの可能性が膨大になります。そこで、まずは教科書に設定されている指導

事項に基づいて考えてみましょう。ただし、どの〔知識及び技能〕と、〔思考力、判断力、表現力等〕を組み合わせるに授業をするかという意識を明確にもっておかないと、提示された活動を表面的になどるだけで終わってしまいます。単元名やリード文、「たいせつ」「ふりかえろう」をよく読み、教科書では、この活動で何を育てようとしているのかということ把握しましょう。

お答えします！



大村幸子先生

東京学芸大学附属小金井小学校教諭。『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』（国立教育政策研究所）調査研究協力者。

各領域を関連づけ、総合的に「思考・判断・表現」を評価することを難しく感じます。



各領域の言語活動をとおして、その背景にある「思考力、判断力、表現力」を評価していきます。例えば、第一学年及び第二学年の学年目標にある「順序立てて考える力」は、スピーチ活動において、相手に伝わるように話す事柄の順序を考えているか、あるいは、観察文を書く活動において、考えが明確になるように事柄の順序に沿って構成を考えているかなど、各領域

の言語活動における「順序立てて考える力」を評価していきます。各領域を総括して評価するので、一人の児童の評価が、領域によって異なるということにはあまりなりません。評価を進める際には、三つのポイントがあります。

①評価する時期や場面を精選する

毎時間、学習状況を評価するのではなく、単元や内容のまとまりごとに、評価の場面を精選することが重要です。また、その単元において、育てたい指導事項を明確にするいっぽうで、年間をとおして、軽重をつけながら継続して指導を行うことも大切です。

②評価方法の工夫をする

見えにくく評価しにくい「思考力・判断力・表現力」を見取る際には、その力が見えるような手立てをとりましょう。思考の可視化といいます。例えば、二年生で、「順序立てて考える力」を評価したときには、短冊を用意し、短冊を並べる姿を観察したり、並べた理由を問うたりすることで、順序を考えている姿が見えてきます。

③児童に振り返らせる

児童に、自分がどのように思考したのか、学びを深めたのかを振り返らせ、言語化させることもとても大切です。自分の学びへの気づきは主体的な学びの原動力になります。また、教師がその児童を評価したり、指導の手立てを考えたりするうえでも、重要な手がかりとなります。

通知表で示す情報が少なくなるので、児童や保護者に伝わらないのでは？



保護者会などで、通知表の観点を説明する機会を設けるとよいでしょう。その際には、学年の目標の具体的な姿をいくつか説明すると、より

わかりやすくなります。また、教科書教材を見せながら、当該学年における目ざす姿について、教材や言語活動をとおして説明すると、よりイメージしやすくなるでしょう。合わせて、年間カリキュラムや学校カリキュラムなどを示して、保護者に見通しをもってもらうのもいいですね。

評価規準に対する「おおむね満足できる状況」は、どう想定するとよいのでしょうか。



まずは、先生方どうして、B（おおむね満足できる状況）について話し合い、具体的なイメージをもつことから始めてみましょう。教材の特性や単元配列、児童の実態などを踏まえてBの姿を想定していきます。

次に、その姿はどのようにしたら見取れるのか、評価方法や手立てを考えていきます。例えば、高学年の「読むこと」の「力共有」を評価する場合には、友達の文章に対する自分の考えをノートやワークシートに書かせ、その記述内容を評価の対象にするとよいでしょう。

特に、「主体的に学習に取り組む態度」は、何を根拠に判断すればいいのでしょうか。



普段から、先生方どうして、主体的に取り組んでいると思われる児童の姿を話題にするとよいと思います。例えば、消しゴムで消して何度も書き直している、友達の書いたものを見て自分にいかそうとしている、助言を受け入れている、短冊を移動させて粘り強く構成を考えているという姿です。

こうした具体的な姿をとおして、粘り強く取り組もうとしているといった態度を見ていきます。授業中には、子どもの中に入り込んで、その学びを見ていけるといいと思います。

さらに、子ども自身の振り返りの記述の中の、「よりよくするために自分はこうしたい」「こう変えたい」という部分も、評価の着目点となります。

かなり個別具体的な見取りになっていくでしょうし、子どもたちの学びの姿や行為を解釈する目が、教師に求められていると思います。